

# 現代経営学演習

担当：平野光俊

## I. テーマと目標

実務家であるゼミ生の日常知あるいは持論，もっと平たく言えば「理屈ばかりでやれるものじゃない」という実務家の矜持に支えられる「その理屈」を，アカデミックな理論と方法を用いて修士論文に結実させることをテーマとします。この過程は研究能力の涵養はもとより，現実の職務遂行能力の向上に直結します。社会人が大学院で学ぶことの意義は，「日常知」と「理論知」という二つの「知」に架け橋をかけながら，未来への構想のもとに職場の問題を分析すること，および自身のキャリアを切り拓く知力と志を育むことにあります。学術における研究能力と実務における職務遂行能力は深いところで繋がります。良い理論ほど実践的なものはない。同時に良い実践ほど理論的なものはないということです。

## II. 教科書・参考書

- ①平野光俊・江夏幾多郎（2018）『人事管理一人と企業，ともに生きるために』有斐閣
  - ②佐藤郁也（2008）『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社
- ①はゼミ生が知識として共有しておくべき人事管理についての教科書です。②は質的方法を用いて論文を作成する場合参照すべき本です。

## III. スケジュール

### 1. 9月22日 教室：三木記念館 演習室 I（以降，同じです）

午後からは M2 の研究成果のポスターセッションに参加します。午前中（1限・2限）は下記のように進めます。

#### ①各自の自己紹介と研究関心（10分）の報告

研究関心を記した簡単なレジメ（A4/1枚・簡条書き）を20部準備してきてください。

#### ②ゼミ幹事の選出

#### ③ゼミの運営方法の確認

### 2. 10月13日

午前中は2人のアカデミック・アドバイザーからご自身の研究の紹介をしてもらい，学術論文の方法論についてイメージをつかみます。

9：00-10：00 質的調査： 野村佳子・摂南大学准教授

10：10-11：10 量的調査① 余合 淳・名古屋市立大学准教授

11：20-12：20 量的調査② 岸野早希・流通科学大学講師

午後（3-5 限）は各自の研究プロポーザル（RP）を発表します。

下記（1）～（4）に即してファイル形式（パワーポイントもしくはワード）で発表してください。ファイルは後日全員で共有します。一人持ち時間は 18 分（発表 10 分+コメントとディスカッション 8 分）。

- (1) 研究テーマ（タイトル）：研究の全体を最も簡潔に表す言葉をつける。必要ならば、どのような研究なのかもっとよくわかるように、サブタイトルを付ける。
- (2) 研究動機（研究関心）：なぜ、このテーマに興味をもつようになったのか、そのきっかけ、理由についてふれる。その際、個人的な関心や背景にも言及する。
- (3) 研究課題（RQ）：私はなにについて知りたいのかを疑問文の形でリストする。その疑問文は、それなら実際に研究調査を実施することが可能だという意味で、オペレーショナルな問いでなければならない。つまり、「よい人事評価制度とはなにか」では RQ としては茫漠としている。「業種や仕事の特性と適合的な人事評価制度はどうあるべきか」なら、よりオペレーショナル（操作可能）である。
- (4) 研究成果のもつ意味：ここで、この研究の成果があがってきたときに、それが（1）自分にとってどのような意味をもつのか、（2）経営の実践にとってどのような意味をもつのか（managerial/practical implications）について、述べる。

### 3. 11月24日

先行研究の批判的レビューの仕方について学びます。各自の RP 基づき、あらかじめ指導教員が関連する先行研究の論文を指定します。各自それに対する「要約・批判的検討・自身の研究にどのように活かそうか」発表します。ファイル形式（パワーポイントもしくはワード）で発表してください。ファイルは後日全員で共有します。一人持ち時間は 30 分（15 分+コメントとディスカッション 15 分）。1 限あたり 3 名が発表します。

### 4. 2月23日

10月13日と同様に RP の発表とディスカッションを行います。ファイル形式（パワーポイントもしくはワード）で発表してください。ファイルは後日全員で共有します。一人持ち時間は 30 分（15 分+コメントとディスカッション 15 分）。1 限あたり 3 名が発表します。

- (1) 研究テーマ（タイトル）
- (2) 研究動機（研究関心）
- (3) 研究課題（RQ）
- (4) 作業仮説：仮説を事前に構築するのが難しい場合がある（そのような場合には、仮説検証よりも仮説発見型の研究調査をすればよい）。しかし、そのような場合でも、この研究調査を誘導していく（最終的に捨ててもいいから）なんらかの作業仮説を事前に設定しておく。作業仮説は、既存研究、日常の観察、事前調査などから、練り上げる。
- (5) 研究調査方法：どのような調査対象に、どのような方法でアプローチして、いったい

どのようなデータ収集方法を用いるのか。

(6) データの種類と分析方法：上述の方法で、いったいどのようなデータが収集されるのかについての計画をここで述べる。あわせて、それらのデータをどのように料理していく予定なのかについても、ここでふれる。

(7) 研究成果のもつ意味

#### IV. 成績評価の方法

下記の基準に即した論文の出来栄で評価します。

1. 論文に対して誠実かつ真摯に取り組んでいること。
2. 仕事で抱いた問題意識に関連したテーマを設定していること。
3. 現実に対して意味のある結果と含意を導出していること。
4. その結果と含意を導くプロセスが信頼に足り、説得力があること。

#### V. ゼミ生に求めること

ゼミのモットーは「知的体育会系」です。体育会系の根性と気力をもって「考え抜く力」を鍛えるべく熱い議論を繰り広げます。考え抜く力は「思考の海」への潜水に例えられます。鍛錬が足りなければ長く息を止めることはできません。ゼミは「思考の海」の深いところへ潜っていく鍛錬の場です。なお、下記のメンバーで演習のサポート体制を組みます。

ティーチングアシスタント：丸子敬仁（D1）

アカデミック・アドバイザー：小泉大輔（大阪国際大学講師）、余合 淳（名古屋市立大学准教授）、岸野早希（流通科学大学講師）